

# 2022年度 入学試験問題

2月1日 第1回 午後

## 国語（45分）

### 注意

1. はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
2. 問題は2から11ページまでです。
3. 解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
4. 解答はすべて解答用紙に書いてください。
5. おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
6. 句読点・記号も字数に数えます。
7. 本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一 — 1〜5の読み方をひらがなで書きなさい。  
また、— 6〜15のカタカナの部分に漢字に直しなさい。  
つづき字ではなく、一点一画をていねいに書くこと。

1 度胸がある。

2 洗顔フォームを使う。

3 日本列島を縦断する。

4 危ういところだった。

5 休日は専ら子どもの相手をしている。

6 リレー選手のコウホになる。

7 ハイクを作る。

8 シセイを直す。

9 部屋をセイケツに保つ。

10 会社にとって大きなソンシツだ。

11 サンマがホウリヨウである。

12 高地ではサンソが少なくなる。

13 マドを開ける。

14 アヤツリ人形のような。

15 ゆっくりと息をスう。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

自然界の生物はバラバラです。そこには優劣ゆうれつはありません。ただ、バラバラであることに価値があるのです。

理屈りくつは頭でわかっていても、実際を把握はあくしようとすると、人間の脳は混乱するばかりです。ものごとをできるだけ単純に理解したい人間の脳が理解できるはずはありません。

人間の脳は、できるだけ事態をシンプルにして、単純に理解したいのです。

数値の順に並べただけでは、まだ理解できません。

先に述べたように、人間の脳は「たくさん」が苦手です。できれば、二つくらいものを比べて、どちらが大きいとか、どちらが小さいかと考えるくらいが、気持ちがいいのです。

1 そのために、人間が作り出したものが「平均」です。

たくさんあるものをまとめて、「平均」というものを作ります。そして、平均の数値と比べれば、大きいとか、小さいとか、長いとか、短いとか判断できるのです。

たとえば、ここに二種類のジャガイモがあります。

Aという品種のジャガイモの五つのイモの重さを計ってみると、二〇グラム、八〇グラム、一一〇グラム、六〇グラム、二八〇グラムでした。

Bという品種のジャガイモの五つのイモの重さは、五〇グラム、一四〇グラム、四〇グラム、一二〇グラム、一五〇グラムでした。

さて、A品種とB品種では、どちらのほうが大きいと言えるでしょうか。

バラバラないくつもの数字をそのままに比べて理解することは、人間には簡単ではありません。

個性ある生物の集団は不均一でバラバラです。しかし、それでは人間が簡単に理解することができません。そこで、集団を比較するために、人間が理解するために作り出したのが、平均値なのです。

最初の例では、A品種は平均が一一〇グラムとなり、B品種は平均値が一〇〇グラムとなりますから、A品種のほうが大きいということになります。

しかし、本当にそうですか。A品種にもB品種より小さなイモがあります。B品種にもA品種より大きなイモもあります。

平均値は、人間が管理するのに都合が良いように、一つの尺度だけを取り出して計測し、足して、割っただけの数値に過ぎません。本当は、ジャガイモの重さはバラバラです。

一つ一つをていねいに見れば、A品種には（1）グラムという大きいイモもあれば、二〇グラムという小さなイモもありました。

B品種には一五〇グラムから、(2)グラムのイモがありました。  
2 本はA品種とB品種とを比較すること自体、まったく意味がないことなのです。

自然界は、ばらつくとはいっても、平均的なものが一番、数が多い多数派になるような気がします。

自然界では、生物の特性の分布は「3 正規分布」と呼ばれる分布をするものが多いことが知られています。確かに正規分布をみると、真ん中の平均値に近いものが多く、平均から離れるに従ってその頻度(II 物事がくり返して起こる度合い)は少なくなります。

しかし、タンポポはすべて黄色い色をしているように、「A」、平均値が優れているのであれば、どの個体も平均値に近づきます。すべての個体が平均値でなく、ばらついているということは、そのばらつきに意味があるということなのです。

【B】、実際には、平均的なものが一番、数が多いとは限りません。

【C】、雑草の高さでは、他の植物と競い合って高く伸びるものもあれば、他の植物と競争せずに、草丈を低くするという戦略もあります。他の植物と競い合って負けてしまうくらいのも、中途半端な草丈が一番、不利なのです。この場合、分布をグラフで表すと二山型になります。

平均がもっとも多いとは限らないのです。

平均に近い存在は、よく「ふつう」と呼ばれます。

それでは「ふつう」って何なのでしょう？

先述したように、人間の脳は複雑なことが苦手です。多様なものは難しく感じます。

複雑で多様な世界を、ありのままに理解することはできないのです。

そのため、できるだけ単純化して、整理して理解しようとしています。バラバラなものは、できるだけまとめようとしています。

こうして、整理して、まとめることで、人間の脳ははじめて理解することができるのです。

そんな人間の脳が好んで使うお気に入りの言葉に「ふつう」があります。

「ふつうの人」という言い方をしますが、それはどんな人なのでしょう。か。「ふつうじゃない」という言い方もしますが、それはどういう意味なのでしょう。

自然界に平均はありません。

「ふつうの木」って高さが何センチなのでしょう。か。

「ふつうの雑草」って、どんな雑草ですか？

踏まれても生えている雑草と踏まれない雑草はどちらがふつうなのでしょう。か。道ばたでは、たくさん雑草が踏まれています。踏まれている雑草は、ふつうじゃないのでしょうか。

先に述べたように生物の世界は、「違うこと」に価値を見出しています。【D】生物は、懸命に「違い」を出そうとしているとさえ言えます。

だからこそ、同じ顔の人が絶対に存在しないような多様な世界を作り出しているのです。一つ一つが、すべて違う存在なのだから、「ふつうなもの」も「平均的なもの」もありえません。そして、逆に言えば「ふつうでないもの」も存在しないのです。

「ふつうの顔」ってどんな顔ですか？

世界一、ふつうの人ってどんな人ですか？

ふつうの顔なんてありません。

ふつうの人なんてどこにもいません。

ふつうでない人もどこにもいません。

ふつうなんていうものは、どこを探しても本当はないのです。

先述したように、人間が複雑な自然界を理解するときに「平均値」はとても便利です。そのため、人間は平均値を大切にします。そし

て、とにかく平均値と比べたがるのです。

平均値を大切にすると、平均値からはずれているものが邪魔じやまになるような気になってしまいます。

みんなが平均値に近い値なのに、一つだけ平均値からポツンと離れていると、何だかおかしな感じがします。何より、ポツンと離れた値があることによって、大切な平均値がずれてしまっている可能性もあります。

そのため、実験などではあまりに平均値からはずれたものは、取り除いて良いということになっていきます。

はずれ者を取り除けば、平均値はより理論的に正しくなります。値の低いはずれ者をなかつたことにすれば、平均値は上がるかもしれません。

こうしてときに「平均値」という、自然界には存在しない虚ろうつろな存在のために、はずれ者は取り除かれてしまうのです。

しかし、実際の自然界には「平均値」はありません。「ふつう」もありません。あるのは、さまざまなものが存在している「多様性」です。

生物はバラバラであろうとします。そして、はずれ者に見えるような平均値から遠く離れた個体をわざわざ生み出し続けるのです。どうしてでしょうか。

自然界には、正解がありません。ですから、生物はたくさんの方を解を作り続けます。<sup>4</sup>それが、( )を生み続けるということなのです。

条件によっては、人間から見るとはずれ者に見えるものが、優れた能力を発揮するかもしれません。

かつて、それまで経験したことがないような大きな環境かんきやうの変化に直面したとき、その環境に適応したのは、平均値から大きく離れたはずれ者でした。

そして、やがては、「はずれ者」と呼ばれた個体が、標準になっていきます。そして、そのはずれ者がつくり出した集団の中から、さらにはずれた者が、新たな環境へと適応していきます。こうなると

古い時代の平均とはまったく違った存在となります。

じつは生物の進化は、こうして起こってきたと考えられています。進化というのは、長い歴史の中で起こることなので、残念ながら、私たちは進化を観察することはできません。

しかし、<sup>5</sup>「はずれ者」が進化をつくっていると思わせる例は見られます。

たとえば、オオシモフリエダシヤクという白いガは、白い木の幹に止まって身を隠します。が、ときどき黒色のガが現れます。白色のガの中で、黒色のガははずれ者です。ところが、街に工場が作られ、工場の煙突えんとから出るススによって、木の幹が真っ黒になると、目立たない黒いガだけが、鳥に食べられることなく生き残りました。そして、黒いガのグループができていったのです。

ニュージールランドに棲むキウイは、飛べない鳥です。鳥が飛べないなんて、おかしいですよね。じつは、キウイの祖先は飛ぶことのできる鳥だったと考えられています。ところが、その中に飛ぶことの苦手な個体が生まれました。鳥なのに飛べないなんて、本当にはずれ者です。ただ、ニュージールランドには、キウイを襲せむう猛もう獣じゆうがいなかったのです。飛んで逃げる必要がありません。飛ぶのが苦手な鳥は、飛ぶことが少ないので、エネルギーを使いません。その分、エサも少なくてすむかもしれませんし、節約したエネルギーでたくさん卵を産むことができますかもしれません。こうして飛ぶのが苦手な「はずれ者」が、飛ぶのが苦手な子孫をたくさん産み、飛べない鳥に進化していったと考えられています。

あるいは、ブラキオサウルスは、全長二五メートルを超えるような巨大な恐竜です。ところが、ブラキオサウルスの仲間のエウロパサウルスは、馬うまくらいくらいの大きさしかありません。ブラキオサウルスの仲間にしては、とても小さな体なのです。

エウロパサウルスの祖先は巨大な恐竜だったと考えられています。ところが、エウロパサウルスはエサの少ない島で進化をしました。そのとき、小さな体の者が生き残り、やがて、小さな恐竜へと進化

を遂げたのです。  
新たな進化をつくり出すのは、常に正規分布のすみっこにいるはずれ者なのです。

人間が作り出したものは揃っていません。  
鉛筆の一ダースの本数がバラバラでは困ります。

一メートルのものさしの目盛りが、一本一本違つては困ります。  
人間は、バラバラな自然界の中で、均一な世界を奇跡的に作り上げてきたのです。

しかし、自然界はバラバラです。

自然界では、違うことに意味があるのです。

あなたと私は違います。けつして同じではありません。  
ただし、違いはありますが、そこに優劣はありません。

例えば、足の速さは、それぞれ異なります。ですから、足の速い子も遅い子もいます。これが運動会になれば、足の速い子は一位になるし、遅い子はビリになります。しかし、それはそれだけのことです。

自然界から見たら、そこには優劣はありません。ただ、「違い」があるだけです。

人間は優劣をつけたがります。しかし、生物にとつては、この「違い」こそが大切なのです。足の速い子と遅い子がいる、このばらつきがあるということが、生物にとつては優れたことなのです。

ところが、単純なことが大好きな脳を持ち、ばらつきのない均一な世界を作りだした人間はときに、生き物にばらつきがあることを忘れてしまいます。そして、ばらつきがあることを許せなくなってしまうのです。

私たちは人間社会で暮らしているのですから、人間の作りだした尺度を無視することはできません。人間が作りだした尺度に従うことも大切なことです。

すべての人が勉強をしている現代社会で、テストで良い点を取っ

て、偏差値が高い優秀な学校へ進学できる人たちは、評価されるべきです。

多くの人たちがスポーツに取り組む中で、一流と呼ばれるアスリートとして、良い記録を出したり、良いパフォーマンスを見せてくれる人たちは、高い評価を得るべきです。

みんながお金持ちになりたいと思つている中で、仕事をして高い収入を得ている人たちも評価されるべきです。

しかし、それで人間に優劣がつくわけではありません。

人間が作りだした「ものさし」も大切ですが、本当は、その「ものさし」以外にも、たくさん価値があるということをお忘れなさい。これが大切なのです。つまり、「違い」を大切にしていくなのです。「ものさし」で測ることに慣れている大人たちは、皆さんにこう言うかもしれません。

「どうしてみんなと同じようにできないの?」

管理をするときには、揃っている方が楽です。バラバラだと管理できません。そのため、大人たちは子どもたちが揃ってほしいと思うのです。

しかし本当は、同じようにできないことが、大切な「違い」なのです。

そんな違いを大切にしてください。

6 おそらく、皆さんが成長して社会に出る頃になると、大人たちは、今度はこう言うかもしれません。

「どうしてみんなと同じような仕事しかできないんだ」

「他人とは違うアイデアを思いつきなさい」

〔稲垣榮洋〕「はずれ者が進化をつくる 生き物をめぐる個性の秘密」

筑摩書房より

問1

——1「そのために、人間が作り出したものが『平均』です」とありますが、人間が平均を作り出した目的として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 自然界のバラバラな生物を同じ基準で比べることで、どの生物が最も人間の役に立つのかを判断できるようにするため。
- イ 多くのものを一つ一つ比べるのではなく、平均と特定の一つの比較という、人間が理解しやすいパターンにするため。
- ウ 人間の脳が上手く理解できない多くのものを平均という形でまとめてしまい、一つ一つの違いをなくしてしまうため。
- エ そのままではバラバラで多様なものを、平均を利用して数値順に並べ直し、人間の脳が単純に理解できるようにするため。

問2

( ) 1・2に入る数字を本文からぬき出しなさい。

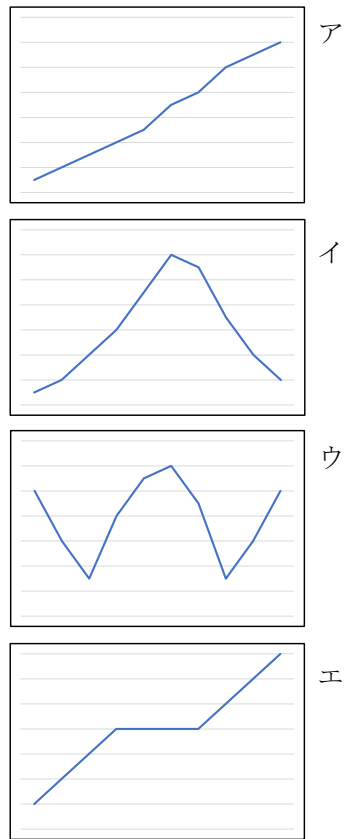
問3

——2「本当はA品種とB品種とを比較すること自体、まったく意味がないことなのです」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア A品種がB品種より大きさがバラバラなのは事実だが、さらに他の品種を調べてみたらもっとバラバラな品種があるかもしれないから。
- イ A品種の方がB品種よりばらつきが大きいということは、最初にイモを選んだ段階で二つの品種が混じっていた可能性が高いから。
- ウ A品種には極端に大きいものと小さいものが混じっているため、もっと調べる数を多くして平均を出すと数値が変わるかもしれないから。
- エ 品種ごとに平均値を出して大きさを比べるのは人間の都合であり、一つ一つのイモの大きさは品種と関係なくバラバラなのが当然だから。

問4

——3「正規分布」を示すグラフの形として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。



問5

【 】 A～Dに次のア～エをあてはめ、記号で答えなさい。  
(同じ記号は一度しか使えません。)

- ア また
  - イ たとえば
  - ウ いわば
  - エ もし
- 問6 ——4「それが、( )を生み続けるということです」とありますが、( )にあてはまる言葉を——4以前の本文から漢字三字でぬき出しなさい。

問7 — 5 『はずれ者』が進化をつくっていると「思わせる例」と

① ありますが、筆者はなぜ『はずれ者』が進化をつくっている」と考えているのですか。四十文字以上五十文字以内で答えなさい。

② 「例」についてまとめた次の表の□ 1～5にあてはまる言葉を、指定の字数でそれぞれ本文からぬき出しなさい。

例	通常	はずれ者の特徴	進化の要因
オオシモ フリエダ シヤク	白色だった	黒色だった	工場から出るススのため 1 七字 になり、 黒い方が目立たなくなっ た。
キウイ	空を飛べた	飛ぶのが 2 二字 だった	飛ぶのが 2 □ な分、 エネルギーを節約でき、 3 八字 ことが できた。
エウロパ サウルス	巨大な恐竜 だった	4 四字 の 恐竜だった	5 七字 に生息 していたため、 4 □ の者が 生き残った。

問8

— 6 「おそらく、皆さんが成長して社会に出る頃になると」とありますが、ここから読みとれる筆者の思いとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自然界同様に、人間の世界でも決められた基準に従うことだけが正しい生き方ではない。「はずれ者」であることが強みになる場合もある。

イ 子どもの頃に大人から言われる「みんなと同じように」という言葉はごまかしでしかない。実際は、大人になるとだれもが自由に生きているのだ。

ウ 「みんなと同じように」という考え方自体はまちがっていない。ただ、自然界同様に、みんなと違う部分がない人は、大

エ 「はずれ者」として生きていくことは、かなりの勇氣が必要だ。しかし、今の時代はそういう人間こそが優れた人間として、社会の進歩・発展を支えている。

問9

本文の特徴として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さまざまな問いをくり返し発することで、当たり前だと思っ

イ 「くですか」や「くません」などの同じ文末の文を続けるこ

ウ 読者がおもしろがるような珍しい事例を紹介して、社会で

エ 大事な内容にあたることは同じキーワードを使って何度もくり返すことで、読者に強く印象づけようとしている。

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

高校三年生の穂積怜は、母の寿絵と二人暮らし。餅湯温泉駅前商店街で土産物屋を営んでいる。父の重吾は怜が生まれる前から行方不明で、怜は父親に強いわだかまりを抱いている。

丸山和樹(美術部)、森川心平(サッカー部)、佐藤竜人(野球部)は、高校の同級生で怜の幼なじみである。この場面の少し前に、心平はふざけて竜人にいたずら(カンチョー)をしかけ、誤って指を骨折した。

寿絵と交代し、店じまいをしていたら、洗面器に石鹼やらタオルやらを入れた丸山がやってきた。

「おう、マルちゃん。心平のこと聞いた？」

「聞いた」

丸山はなぜか浮かない表情でうなずいた。「竜人に博物館へ誘われたけど、断ったよ」

「俺も。ほっときやいいんだ、あいつらのことは」

「うん……」

「どした？ なんかあった？」

「ううん……」

力なく首を振った丸山は、気を取りなおしたようにあえて明るく、「怜も風呂行かない？」

と持ちかけてきた。怜はすでに夕飯まえ、家の風呂に入っていたが、もちろん、

「1 いいね。ちよつと待ってて」

と答えた。急いで二階に上がり、風呂の道具をそろえて、また階段を駆け下りる。

丸山は洗面器を抱え、店のまえでうつむきかげんに立っていた。

怜はシャッターを半分だけ下ろし、丸山と連れだって、商店街のなかほどへと歩きたした。

(中略)

怜と丸山が「餅の湯」を訪れたときには、あと三十分ほどで営業時間が終わる頃合いだったからか、男湯にほかに客はいなかった。出入り口の引き戸を開けてすぐ右手にある、二畳ほどの事務スペースで暇そうにテレビを見ていた金物屋のおじさんに代金を渡し、下駄箱に靴を収める。

手早く髪と体を洗い、二人そろって湯船に浸かると、自然と「ふいー」と声が出た。ここの湯は無色透明だが、ほのかに海の香りがし、舐めると少ししよっぱい。

『餅の湯』にきた夜つて、布団に入るとなんか足がむずむずするところがある」

と、怜は洗い場に立ちこめる湯気を見ながら言った。

「俺もある。血行がよくなるからかな」

「見た目はふつうのお湯と変わらないのに、温泉って不思議だね」

会話が途切れ、怜は隣にいる丸山をさりげなくうかがった。丸山は電灯を映して揺れる湯面を眺めている。ふくふくとした耳たぶが熱気のせいで少し赤くなっている。

「俺さ、自分がいやになつたよ」

しばしの沈黙ののち、丸山が静かに話した。

「どうして」

「2 心平が美大受けることにしたの、知ってる？」

「いや、初耳」

怜はびっくりし、湯のなかで丸山のほうに体を向けた。「いまからやってまにあうもんなの？ デッサン(＝絵の下書き)とか大変なんだろ」

「山本先生も驚いたみたいで、俺や美術の林先生にいろいろ聞いてきたよ」

山本先生の慌てぶりを思い出したのか、丸山はちよつと笑った。「俺が通ってる丘の麓の絵画教室を紹介してあげた。心平は部活があるから土日しか来られないし、まだ初級者コースだけど、デッサン



はどんどんうまくなってる」

「学科だってあるのに、あいつなに考えてんだ」

「そっちはまた俺たちが特訓してあげればいいんじゃない」

丸山はあくまでも鷹揚（「ゆつたりと落ち着いたようす」）である。

「怜もこのあいだ、心平が粘土で作った馬の埴輪を見たでしょ。才能ってこういうことなのかもなあって、俺はつくづく思った」

「もしかして心平、土器づくりが楽しかったことを思い出して、美大を受けるなんて言い出したの？」

「詳しくは聞いてないけど、そうなんじゃないかな。絵画よりは陶芸とか彫刻とか、立体物に興味があるみたいだったし」

お湯から出した手で顔をぬぐった丸山は、ついでに表面張力を楽しむように、掌で二度ほど湯を叩いた。その行為に、丸山にしてはめずらしいいらだちを感じて、

「だけどうして、マルちゃんが自分をいやになるんだよ」

と、怜は I おずおずと尋ねた。

「心平が指を骨折したって聞いたとき」

丸山は低くかすれた声で言った。「俺はまっさきに、『じゃあしばらくデッサンの練習できないな』と思った。そのまま美大受験に飽きてくれればもつといいのにつて喜んだ」

怜は咄嗟に言葉が出なかった。そうか、マルちゃんは心平に嫉妬して、でもそんな自分がたまらなくいやなんだ。

二月にあった文化祭で、丸山が出品した絵が思い浮かんだ。ずっと取り組んでいたその油絵は、餅湯城と青い海が描かれているはずだったが、怜がしばらく部活をさぼっているあいだに、夜の海と丘のてっぺんに白く浮かびあがる不吉な廃墟に変じていた。キャンパスのうえで、闇からにじむ暗紫の波濤が逆巻く。マルちゃん、新境地だな、と怜は呑気に思ったものだが、あれは自身に対する不安やあせりを感じた丸山の、荒々しい心象風景だったのかもしれない。

怜はといえば画用紙に適当に絵の具を塗りたくり、抽象画だと言いつつ II お茶を濁した。

「マルちゃんはずっと真剣に絵を描いて、美大を目指してきたんだから、ちらつとそんなふうにも思っちゃうのも当然なんじゃないの」

「でも、骨折だよ？ 大怪我だ。なのに一瞬でも喜ぶなんて、3ほんとサイテーだ」

「いや、カンチョーが原因の骨折だし……」

なんとか丸山の気持ちを楽にしたくて、怜は必死になだめようとしたが、

「いいんだ、怜」

と丸山は立ちあがり、浴槽から出ていく。「とにかく自分のサイテーぶりを 4 だれかに聞いてほしかっただけで……」

そこまで言って、丸山は洗い場にしゃがみこんでしまった。

「マルちゃん!」

どうやら湯あたりを起こしたらしい。怜は慌てて洗い場に飛びだし、シャワーなどという洒落たものは「餅の湯」にはないので、蛇口から洗面器に冷水を汲んで丸山の頭からかけた。

「マルちゃん、しっかりしろ！ おじさん、ちよつと来てくださーい!」

金物屋のおじさんと協力し、丸山を脱衣所にかつぎだした。おじさんが持つてきてくれた貸し出し用のバスタオルで丸山をくるみ、板張りの床に横たわらせる。おじさんと二人がかりで団扇で扇いでいたら、ややあつて丸山が意識を取り戻した。

「マルちゃん、大丈夫か」

「うん、ごめん。なんかクラツとした」

「よかったよかった。長風呂もほどほどにしないと」

と、おじさんは餅湯温泉サイダーを怜と丸山におごってくれた。「ちよつと休んでから帰りなさい」

おじさんは表の電気を消し、浴槽の湯を抜いて掃除をはじめた。

怜は持参したタオルを腰に巻いた格好のまま、丸山のかたわらにしゃがみこんだ。丸山も身を起こし、二人は脱衣所で冷えたサイダーを少しずつ飲んだ。

「またあの感じがする」

と丸山が III 唐突につぶやいた。「なんだか死んじやったあとみたい  
な」

「えーと、具合悪い？」

気分だけでなく頭の具合も悪くなったのかと、怜は怖々と尋ねた  
のだが、

「大丈夫。かえってさっぱりした気持ちだよ」

と丸山は言った。「そういうとき、たまに不思議な感覚になる。俺  
はもうとつくに死んで、いま怜と話しながらサイダー飲んでるの  
も、生前のことをあの世で思い返してただけじゃないかって気がし  
てくる」

「へええ」

「怜はそういうことない？」

「ない、かなあ……」

やつぱりマルちゃんは繊細だ、と怜は感心した。駅前広場で重吾  
と遭遇したとき、まわりのすべてが遠のき、冷たく静かな死後の世  
界に入りこんでしまった感じはした。でも、丸山が言っているのは、  
たぶんそれとはちがうだろう。もっと親密で、満たされてあたたか  
な感覚。マルちゃんを感じる疑似死後に俺も存在してるんだと思  
ったら、怜の指さきは不可思議な充足感でぬくもった。あるいは、  
単純に温泉の効果かもしれない。

黄色い光を投げかける電球が、じじ、じじ、と天井で鳴っている。  
餅湯にはLEDではない照明がたくさんある。

「俺はマルちゃんのこと、サイテーなやつなんて思わない」

気恥ずかしかったが、怜は思いきって言った。「むしろ、6 いいや  
つだと思ってる。いままでも、美大の話を聞いたあととも」

怜とてだれかに嫉妬するほど経済学部を志してみたいものだが、  
到底無理だ。絵を描くことに対する丸山の情熱、秘められたうねり  
は、怜にはまばゆく感じられた。そんな情熱を抱えながらも、心平  
の降って湧いたような美大受験話に対して親身に相談に乗ってやり、

才能を認め、自身の物思いを醜いと嫌悪する丸山の優しさ、誠実さ  
を、好ましく受け止めこそすれ、いやだなどと思うはずもない。

丸山はサイダーを飲み干し、

「そうかな……。さんきゅ」

と照れくさそうに言って、小さくげっぷをした。

(三浦しをん『エレジーは流れない』双葉社より)

問1 — I、II、IIIの意味として最も適当なものを次から選び、記号  
で答えなさい。

I 「おずおずと」

ア 不思議そうに  
ウ 何の気なしに  
エ 強い口調で

II 「お茶を濁した」

ア ごまかした  
ウ あきらめた  
エ 押し通した  
イ 隠しきった

III 「唐突に」

ア 静かに  
ウ 急に  
エ さびしげに  
イ つらそうに

問2

—— 1 「いいね。ちよつと待ってて」とありますが、怜がも  
う一度風呂に入ろうとしたのはなぜですか。最も適当なもの  
を次から選び、記号で答えなさい。

ア 丸山も竜人の誘いを断つたことが分かったので、後で竜人に恨  
まれないよう餅の湯で相談しておきたかったから。

イ 心平のケガについて丸山が責任を感じているようなので、一緒  
に風呂で汗を流して気持ちをほぐそうとしたから。

ウ 浮かないようすの丸山が自分を風呂に誘ったのは、何か話し  
たいことがあるからではないかと感じたから。

エ 家の風呂よりも餅の湯のほうが気持ちがいいし、気心の知れ  
た丸山とのんびり話をするのもいいと思ったから。

問3

——2 「心平が美大受けることにしたの、知ってる？」以降の一連の描写から読みとれる心平のようすとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 部活中心で進路など全く考えていないようだったが、自分の好きなことが見つかりと周囲を気にせず、それを追求している。

イ 部活に熱中して他のことをおろそかにしてきたが、自分の夢を実現するために必要だと分かると、丸山から絵の技術を学ぼうとしている。

ウ 周囲のおかげで何とか高校生活を続けてきたが、部活以外にやりたいことが見つからず、むりやり志望を決めてしまっている。

エ 部活以外にはまじめに取り組んでこなかったが、教師も驚くほどの真剣さで勉強を始め、子供の頃からの夢を叶えようとしている。

問4

——3 「ほんとサイテーだ」とありますが、丸山は自分のどのような点を「サイテー」だと思っているのですか。次の文の□に合うように答えなさい。ただし、①は五字以上十字以内、②は十字以上十五字以内で答えなさい。

友人が骨折したのに、①より先に②かもしれないと期待してしまった点。

問5

——4 「だれかに聞いてほしかっただけで……」の後に丸山が言うはずだった言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 相手はおまえじゃなくてもよかったんだ。  
イ フォローしてもらいたいわけじゃないんだ。  
ウ そういうなぐさめはむしろ迷惑なんだ。

エ この借りはいつか返すつもりだ。

問6

——5 「あの感じ」とありますが、丸山の言う「あの感じ」を怜はどのようにとらえていますか。本文から十六字でぬき出しなさい。

問7

——6 「いいやつだと思ってる」とありますが、怜が丸山を「いいやつ」だと思うのはなぜですか。解答らんに合うように、三十文字以上四十文字以内で答えなさい。ただし、以下の言葉を必ず用いること（嫉妬・誠実）。

問8

本文の表現に関する説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 会話文に「……」を用いることで、お互いに本音を言えない怜と丸山の関係を表している。

イ 擬音語や擬態語を多く用いることで、読者が実際の場面を思い起こしやすくなっている。

ウ 一定の間隔をあげて心平の心情を差しさむことで、複数の視点で物語が語られている。

エ 怜の視点を中心に物語が展開して、丸山に対する怜の心情がいていねいに描かれている。